

「推理小説で動物が用いられるのは、動物がトリックを構成する一つの『駒』として使いやすい場合があるからだろうね」明瀬匠悟が言った。

「どういった点で使いやすいんでしょうか？」永緑涼は応じる。

明瀬と永緑の二人は、朝っぱらからミステリ談義を繰り広げていた。

彼らは、雑居ビルの三階の一室を借り、ここに、完全紹介制の探偵事務所を構えている。「完全紹介制」の言葉通り、ここに訪れるのは、ほとんどが彼らの知人か、知人に紹介された人物だ。わざわざそんなところに持ち込まれてくる事件だけあって、それらは推理小説に出てくるような、不可解なものばかりだ。

もっぱら探偵役になる明瀬と、重度のミステリマニアであり、いつも助手に近い役割を担っている永緑は、それぞれ大学の先輩と後輩だった。明瀬は一年前に大学を卒業している。永緑も先月卒業して、大学院に進んだところだ。

この二人が現在、推理小説について語り合っているのは、永緑が動物トリックを扱った推理小説を読んで、「僕ならトリックに動物は使いませんか」とこぼしたことが原因だ。

明瀬は、動物トリックが使われる理由について論じている。

「まず、動物には、人間的な意志や思惑がない。こうしてやろう、あえてやろう、といった善意も悪意もなく、基本的には自らの本能と、快や不快の感覚に従って行動する。だから、それほど複雑な行動はとらない。

次に、動物は、人間には不可能なことができたり、逆に、人間には可能なことができなかったりする。例えば、人間には通れない穴で

も、小さな動物なら通れるし、逆に、人間には通れる穴でも大きな動物には通れないよね。人間との差異で可能性の幅を調節できるんだ。それに何より、動物は人語を解せないから、犯罪の証人にはなり得ない。

言うなれば動物は、人と物との中間だ。人ほど自由には動き回らないが、物のように柔軟性に欠けるわけでもない。こういった点が、動物が推理小説に使われる理由かな。もちろん、動物をトリックに用いることには利点ばかり、というわけでも……」

明瀬がそこまで言った時、事務所のドアのすりガラスの向こうに、人影が現れた。永緑は扉を背にしているため気づいていない。

「どうしたんですか？」

「……依頼人が来たみたいだ。お茶の用意、頼める？」

永緑は振り向いて人影を確認すると、わかりました、と言って奥の部屋へお茶を入れに行った。

ドアがノックされる。

「どうぞ——」明瀬は立ち上がりながら、自分の身なりと部屋が整っているかを確認した。

依頼人によってドアがあげられる。そこから現れたのは、明瀬の知っている人物だった。スポーティーな服に、ショートカットの黒髪。

「ああ、鳩村さん。久しぶりだね」

「久しぶり、明瀬君」鳩村和音はにっこり笑った。

「まあ、とにかく、入ってきて座りなよ」と明瀬はソファを示す。

「ありがとう」彼女は部屋に入りドアを閉めて、明瀬の促す通りソファに座った。

明瀬もテーブルを挟んだ向かい側のソファに座る。そして、半ばあきれたように切り出した。「……やっぱり、『また』なのかい？」

「ええ、『また』なの」鳩村は少し目をそらしながら答えた。

「いったいこれで何回目だい？ まったく、君は相変わらず天に愛

されてるね。愛されすぎなくらいに」

お手上げ、といった感じの明瀬の言葉に、鳩村は曖昧に笑うだけだった。

彼女は明瀬の中学、高校の同級生だ。彼女は、一般的な中学生や高校生と特に変わったところのない、普通の学生だった。ある一点を除いては。

日常的に事件に遭遇する——およそ一般的とはかけ離れたこの性質によつて、物心がついたところから、いつも事件が彼女の周りを取り巻いていた。しかし、彼女自身にはその事件を解決することはできず、その半分くらいは迷宮入りになってしまっていた。

しかし、中学に入ると、迷宮入りする事件はほとんどなくなってしまう。明瀬匠悟が出現したからだ。鳩村の周りで起きた事件を明瀬が解き明かす。それが通例になっていった。明瀬とは別の大学に行くことになったが、そこでまたほかの名探偵と出会ったそうだった。明瀬を訪ねる回数は減ったが、それでもたまに事件解決の依頼をしに来るのは、その探偵が苦手だから、ということらしい。

「それで、今度の事件はどんな事件なの？」

「密室殺人みたい。密室の中に、死体と鍵が一つずつ。あと、フクロウが一匹……」

鳩村が言った直後、事務所の奥の部屋から、陶器のぶつかる音と、「熱っ！」という声が聞こえてきた。

思わず覗き込もうとする鳩村だが、ドアが閉まっていて奥は見えない。「どうしたんだろう……」

「大丈夫だよ。特定の言葉に異常に反応する厄介な助手でね……」

「へえ、面白そうだなね」鳩村は本気でそう言っているようだ。永緑がお茶をお盆にのせて戻ってきて、テーブルに三つお茶を置いた。

そこで彼女と目が合つて、「あ、もしかして恋人……？」とつぶやいた。

それに対して明瀬は明朗に笑つてから、違うよ、と否定した。

そして永緑に、「こちら、中学、高校時代の同級生だった、鳩村和音さん」と紹介し、今度は鳩村に、「それで、このそそっかしいのが大学の後輩だった、助手の永緑涼」と紹介した。

「初めまして、鳩村さん」

「こちらこそ初めまして」

永緑と鳩村はお互いに挨拶すると、明瀬が永緑に座るよう促して、永緑は明瀬の隣に座った。

「それじゃあ、お茶も出てきたことだし、詳しい事件の話を聞きましょうか」

探偵の言葉を受けて、依頼人は語りだす。

## 2

「私には、最近、フクロウを飼い始めた知り合いがいるの。仮に、Aさんとするわ。彼は時間を自由に使える職業で、一人暮らしなのに二階建ての一軒家に住んでるのよ。しかも、家の裏には森。何とも贅沢なことだけど、そのくらい生活に余裕があるからこそ、フクロウを飼えるんでしょうね。それで、彼が飼ってるのは『ユーラシアワシミミズク』っていう種類のフクロウで、その『ユーラシアワシミミズク』ってすごく大きいのよ。七十センチメートルくらい。それだけ大きいから、きつと食べる動物も大きいんだろうなあ、と思つて調べてみたの。食べるのは、哺乳類を中心に、鳥類、爬虫類、カエルなどなど。野ウサギを食べることもあれば、小さい種類のフクロウを捕食することもあるっていう話よ。それに、フクロウって、へびなんかと同じように、基本的には獲物を丸呑みして消化して、消化しきれなかった毛や骨を、口から吐き出すらしいわね。吐き出したものはペリットって呼ばれるそうだけど……。想像してたより、結構生々しいでしょ。」

Aさんの家では、フクロウを部屋の中で半分放し飼いにしていたらしいわ。半分、っていうのは、普段は部屋のケージの中で飼育して、人がいるときだけケージから出すっていうことみたいね。『ユーラシアワシミミズク』なんて大型種を飼うだけあって、部屋はかなり広いわ。窓も大きくて、扉は二重扉。しかも、Aさん以外が勝手に入れないように、錠までついてる。部屋の中には普通の家具以外に、フクロウの止まり木や、フクロウを入れるケージなんかがあるわ。

それで事件のことなんだけど、二日前の夜遅くに、私のところにAさんから電話がかかってきたの。そんなに親しかったわけでもないのに、急にね。

Aさんの話によると、Aさんは、隣人であり、フクロウをずっと前から飼っている、いわばフクロウ飼いの先輩でもあるBさんに、フクロウの飼い方のアドバイスをよくもらっていたらしいの。その日も、Bさんに家に来てもらっていたそうなんだけど、Aさんがタバコを吸いたくなつて、少しの間、外に出たらしいのよ。Bさんはタバコ嫌いだったから、近くで吸わないようにと気遣つてね。それで、戻ってきたら、Bさんがいない。フクロウの部屋にいいのか、と思つて行ってみると、錠がかかっているの。フクロウ部屋の二重扉には錠がついてるって言ったわよね。その二重扉の二つの錠は、どちらも同じ錠で開けられるんだけど、廊下からも部屋の中からも、錠がないと通れないのよ。Aさんは外に出る時、Bさんの前に錠を置いてきていたから、その錠でBさんが中に入ったんだろうと思つて、扉をたいてBさんと呼んだの。でも、中からは反応がない。

二つの扉には両方とも、床との間に五センチくらいの隙間があるんだけど、二重扉の間の床には、こちらも五センチばかり出っ張っているところがあって、直接中をのぞくことはできない。それでも、中の明かりがついていたら光が漏れてわかるだろう、と思つてのぞいてみるけど、光は見えない。外は真っ暗だから、中に人がいるなら明かりをつけるはずなのに。

家中探したけれど錠はないので、やはり部屋の中にBさんがいるのは確かで、錠もBさんが持っているはず。家の裏に回ってフクロウ部屋の窓を確かめてみても、窓の錠は内側から閉められているし、カーテンがかかっている中は見えない。光が漏れていないから明かりはやはりついていないらしい。これはただ事じゃない、とにかく錠を開けなければ。そう思つたそうよ。

それで、私が呼ばれたの。私はピッキングができるから。私が駆けつけるとAさんは、窓が閉まっかけていて、扉にも錠がかかっている部屋が完全に密室であることを私に確認させてから、錠を開けさせたわ。だいたい一分くらいかかったかな。錠を開錠して私たちが扉を開けると、中から血の臭いがしたの。そんなに強烈なものではなかったけど。

案の定、死体——もちろん、これはBさんよ——があったわ。死体は、部屋に入って右奥にある棚と、その近くに設置されたフクロウの止まり木との間に倒れていて、床には頭を中心として血が広がっていたわね。棚の角にも血痕が付いていたから、どうやら、棚の角に後頭部をぶつけて死んだみたい。誰かに突き飛ばされて殺されたとも、バランスを崩して倒れ、頭をぶつけたともとれる死体だったわね。

止まり木の上にはフクロウが止まっかけていて、私たちを見下ろしていたわ。パチパチ嘴を鳴らして、威嚇していたみたいね。

Aさんは、部屋に入つてすぐ、駆け寄ってカーテンを開けて、窓も全開にしたわ。何か危険なガスでも漏れているんじゃないかって思つたそうよ。私は血の臭いを知つたけど、Aさんはもちろん嗅いだことなかったそうだから、無理もないかもしれないわね。でも、それがまじりかた。

フクロウがそこから飛んで行つてしまったの。音もなくAさんの横を通つて、窓からね。外の森に逃げ出してしまったのよ。

そこでやっと死体を見つけたみたいで、Aさんは腰を抜かしてし

まったわ。部屋の奥に倒れていたから、死体がAさんには見えていなかったみたい。Aさんは役に立ちそうもなかったから、私が警察を呼んだの。

その後、警察が来て調べた結果、Bさんの服のポケットから部屋の鍵が見つかったわ。つまり、私がピッキングして開錠するまで、あの部屋は密室だったのよ。

Aさんの行動も監視カメラで裏付けされているわ。AさんとBさんの家がある通りには、監視カメラがいくつか設置されていたの。そこに、BさんがAさんの家に向かうところや、Aさんがしばらくタバコを吸っているところ、それから、窓が閉まっていることを確認するために家の裏に回る様子が、ばっちり残っていたわ。Aさんの家は二つの監視カメラによって捉えられていて、Aさんの家で映っていないのは、森の広がついてる裏側のみね。でも、家の裏にはフクロウ部屋の窓を除けば、出入り口となるものはないから、Aさんがこっそり外に出た、ということもないわ。

これらの事実を踏まえて、警察は事件をこう解釈しているようよ。Bさんは、Aさんがいない間に、鍵を使ってフクロウ部屋に入った。そして、フクロウをケージから出し、止まり木に止まったフクロウに近づいた。その時、フクロウが威嚇するか何かして、それに驚いたBさんは体のバランスを崩し、後ろにあった棚の角に後頭部を強く打ち付けて、亡くなった。

確かに、この解釈で事件は説明できるわ。でも、私にはいくつか気になるところがあるの。Aさんの話が本当なら、Bさんの行動は不自然だわ。どうして飼い主が帰ってくるまで、フクロウ部屋に入るのを待たなかったの？ ほかにもあるわ。Aさんはなぜ、フクロウ部屋の窓の鍵がかかっていることまで、私に確認させたの？ まるで、部屋の中に死体があることを知っているみたいじゃない。それに、嗅いだことがなかったとはいえ、血の臭いをガスなんかの臭いと間違えるものかしら？ 可能性がないとは言えないわ。でも、不

自然よね。

私は、もしかするとAさんが犯人なんじゃないかと思うの。彼には動機もあったわ。実は、Aさんは最近、仕事で失敗してお金に困っていたらしいの。Bさんに多額の借金をしていたそうよ。それに、フクロウの飼育にもお金はかかるわ。『ユーラシアワシミミズク』のような大型種ともなるとなおさらね。

これで犯行が可能なら、Aさんが犯人だと思っただけで間違いはないわね。でも、Aさんが犯人だとすると、密室の謎が浮かび上がってくる。

Aさんが犯人であるにしろ、そうでないにしろ、疑問点は残るわ。だから、私はあなたにこの疑問を解消してもらおうと思っただけで、ここに依頼をしに来たの。

これで、事件の経緯とかは一通り説明したはずだけど……。何か、質問はある？」

### 3

鳩村は長い説明を終えて、ふう、と息を吐き、もうぬるくなってしまったお茶を飲んだ。

「あの……」永緑が遠慮がちに、「一つ、気になるんですけど……」

「どうしたの？」と鳩村。

「えーと……ピッキングって、法的に大丈夫なんですか……？」

心配そうに言う永緑に対し、鳩村は、なんだそんなことか、といかにものんきに、

「大丈夫よ。だって、私の実家、昔は鍵屋やってたんだもの。だから、私もピッキングはできるようになったの。それに、法的にも問題はないはずよ。だって、Aさんのフクロウ部屋の鍵を開ける正当な理由があるもの。夜遅くだから鍵屋も閉まっている時間だったし、フクロウに餌をやる必要もあったから、鍵はできるだけ早く開けてあ

げないといけなかったしね。……まあでも、結果的にフクロウは逃げちゃったけど」

フクロウと遊べなくて残念、といったふう言う鳩村だが、一方永緑は、とんでもないことをさらつと言われて、なんだか釈然としないようだった。明瀬は、まあ、気にしない方がいいよ、と慰めるように言い、永緑も、わかりました、と返すが、納得した顔ではなかった。

「部屋の鍵は、どんな鍵だった？」今度は明瀬が訊いた。

「確か……大きさはちよつと小さめで、形は横にギザギザの付いた普通の形の鍵だったと思うわ」

「部屋の鍵は、Bさんの服のポケットから発見された一つだけだったの？」

「Aさんが言うには、部屋の唯一の鍵らしいわよ」

「でも、Aさんが嘘をついていて、実は合い鍵を作っていた可能性もあるんだよね？」

「ええ、まあ、それは否定できないけど……。でも、警察が家を調べても、合い鍵は出てこなかったわ」鳩村は一瞬考えた後、「……やっぱり、Aさんが犯人なの？」

「君の話に出てきた容疑者としては、君を除くと、Aさんしかいないよね。あるいは、Bさんが起こした事故かもしれないけど。……ほかに容疑者はいないんだらう？」

「ええ、特に」

「なら、Aさんが犯人である可能性は高い。何しろ、Aさんは最も自由に関わり回れた人物だからね。密室をチェス盤に例えるなら、Aさんはクイーンだ」

「じゃあフクロウは、チェスで言うところの何？」

「差し詰め、キングだね」

「ふーん、なら、謎はもう解けたの？」鳩村はやや挑戦的に言う。「ままだよ。質問したいことがいくつかある。……フクロウはもう

見つけたのかい？」

「いいえ、まだみたい。森は結構大きかったしね。それに、Aさんもフクロウを外で飛ばせるつもりはなかったから、発信機をつけていなかったらしいわ。だから、余計に見つかりにくいでしょうね」

明瀬は、やっぱり、という感じで頷いて、「じゃあ、次の質問。君たちが現場に踏み入ったときの様子で、窓を開けたりしたら、やっぱり、フクロウは逃げたものかな？」

「ええ、そうだと思うわ。だって、部屋の中には不快な血の臭いが充滿していたし、それに、あのフクロウは、野生で捕まえたのを輸入したフクロウだったらしいから、人に育てられた個体より、ずっと逃げやすかったはずよ」

「なるほどね。……フクロウの餌は、何を与えていたんだい？」

「フクロウの餌はいろいろあるの。Aさんの場合、マウス、ヒヨコ、ウズラ……とにかく、それらを——冷凍のものは解凍して、処理してからだけど——与えていたらしいわ。与える餌が種類だけだと、フクロウの栄養が偏ってしまうの。だから、栄養やカロリーのバランスなどを考えて、計画的にいろいろな餌を与えていたらしいわ」

「確認するけど、その密室は、『ピンと糸の密室』トリック——つまり、扉の下の隙間から糸を通して、Bさんのポケットに鍵を送るような芸当で作ったものではないんだよね」

「ええ、Bさんの鍵が入っていたポケットは、Bさんのズボンの後ろのポケットだったし、Bさんは仰向けに倒れていたから、糸を通したりするのは、難しかったと思うわ。もちろん、そういった道具も発見されなかったみたいだし」

「密室が破られた後で、AさんがBさんのポケットに鍵を入れることも、無理なんだね」

「もちろん。私がずつと見張ってたもの」

すべての質問と確認を終えた明瀬は、納得したように頷いた。永緑はそれを見て、

「……先輩、もしかして事件の謎が解けたんですか？」

「事件現場も見えていないのに、解けたと断定するのは性急だ。でも、現時点でそろっている情報のみで判断するならば……一つだけ、密室の謎を説明できる解釈があるよ」

それから続けて、  
「もしこの解釈が正しいなら、この密室は、まるでマトリョーシカだね」

4

「マトリョーシカ？」鳩村はおうむ返しに尋ねる。

「まあ、物の例えだよ」明瀬は少しばかり照れたように言った。  
「どういう意味ですか？」

永緑の質問に、あとでわかるよ、と返した後、明瀬は姿勢を正して、自分の推理を披露し始めた。

「前提条件として提示しておくけど、これから話す解釈は、BさんがAさんのいない間に部屋に入って事故で死んだ可能性を考えない場合の解釈だよ。鳩村さんの話だけ聞くと、事故の可能性は——もちろん、多少不自然であることは否めないもの——十分にあるようだからね。

事故の可能性を考えない場合、犯人はおそらくAさんだ。そもそも容疑者が彼くらいしかないし、さっきも言った通り、彼が最も自由に動くことができる人物だ。

Aさんが犯人なら、彼の行動はある程度想像がつく。まず、Bさんを家呼び出し、そして、フクロウ部屋の棚にBさん突き飛ばしてBさんを殺す。その後、フクロウをケージから出し、二重扉の鍵をかけて外に出る。ここまでではほぼ確実だろう。密室の中に死体とフクロウ、という状況を作り出すには、こうするしかない。

では、彼はどうやって鍵を処理したのか。施錠した後で、Bさんの

服のポケットにその鍵を入れるのは、どうやら不可能らしい。となると、こう考えるしかないよね。Aさんは、Bさんを殺した後、Bさんの服のポケットに鍵を入れてから——」明瀬は一呼吸おいて言った。「——合鍵を使って、扉の鍵をかけたんだ」

「ちょ、ちょっと待ってください。合鍵、ですか？」永緑が驚いて思わず訊いた。

「うん、そうだよ。合鍵を使ったんだ」

「でも、鳩村さんも言ってたじゃないですか。『家から合鍵は見つからなかった』って」

「そう、警察が調べた時点では、合鍵はもう家にはなかったんだ」「つまり、Aさんが、その合鍵をどこかに捨てた、ということですか？」永緑が怪訝そうに尋ねる。

「それは無理よ」鳩村も加勢した。「だって、Aさんには鍵を捨てられないもの。Aさんが外に出ると、監視カメラの映像に残ってしまうのよ。BさんがAさんの家に入ってから、Aさんが家を離れた場面は一度もなかったわ。しいて言えば、窓が閉まっていることを確認するためにAさんが家の裏に回ったときだけど、その時はすぐに戻ってきたわ。鍵を遠くに捨てることなんてできっこないわよ。裏からの出入り口となりそうなものは、フクロウ部屋の窓しかないけど、その窓も施錠されていたの。もし仮に、監視カメラに映らないように裏から出られたとしても、裏は森よ。足跡が残ってしまうわ」  
立て板に水のような反論に、明瀬は肩をすくめた。

「Aさんが自分で鍵を捨てたとは言っていないよ」

言い訳めいた言い方になってしまったな、と明瀬は思った。  
「どういうことですか？」永緑が訊く。

「別に難しく考えなくていいんだ。密室ができた時、鍵は家の中にあつた。そして、警察が家を調べた時、鍵は家になかった。つまり、鍵はこの間に家から出て行ったんだ。ほら、一つだけあるだろう、密室が破られてすぐに、家から出て行ってしまったものが、ね」

「……ま、まさか、フクロウですか？」永緑は大きく目を見開いた。

「そう、フクロウだ。窓から飛び去ったフクロウの体内には、部屋の合い鍵が入っていたんだ」

「で、でも、どうやって……？」

「どうやってフクロウの体内に鍵を入れたのか……。無理矢理フクロウの口に押し込むことはできないよね。となると、フクロウが自分から食べるように仕向けるしかない。例えば、餌の中に潜ませて、ね」

そこまで聞いた永緑が、突然、

「マウスですね！ マウスの中に鍵を入れて、扉の下の隙間からそのマウスを密室内に送り込み、フクロウに食べさせたんですね！ フクロウは獲物を基本的には丸呑みする動物です。だから、食べる時、血などの痕跡が残りにくいし、体を食いちぎられたりしてマウスの体内から鍵が落ちてしまう心配もない。だからフクロウだったんですね！」

興奮して明瀬に詰め寄ったので、明瀬は少したじたじとなった。

「……ちよつと、落ち着こうか」

明瀬に言われて、永緑は自分の失態に気づき、すみません、と顔を赤らめた。

それを冷静に観察していた鳩村は、「永緑さんって、やっぱり面白い人ね」と笑ってから、「でも、マウスを扉の下の隙間から密室の中に送るのは、難しいと思うわ。だって、前にも言ったけど、二重扉の間の床には出っ張っているところがあるもの。つかえてしまつて通らないわ」と、問題点を指摘した。

明瀬は頷いて、「そう、マウスをそのまま密室内に送ることはできない。だから、マウスの中の鍵を、密室の中のフクロウに送るためには、もう一ひねりする必要がある」

「もう一ひねり、というのは……？」と永緑。

「うん、ここで考えてほしいんだけど、マウスをそのまま密室に送ることができない理由は、マウスが、自分では動かない死体——すなわち、『物』になってしまつていて、段差を自分で越えることができないからだよね」

「ええ、そうですね」

「なら、生きている動物が、体内に鍵を含んだ状態で、自分で段差を超えてフクロウ部屋に入り、フクロウの餌になつてくれればいいわけだ」

「そういうことになります。でも、そのフクロウの餌になる、生きている動物の体内に鍵を入れるためには、その動物を殺し、腹を裂くなどしてそこから鍵を入れるしかないんじゃない？」

「そうかな。例えば、その動物にマウスを丸呑みさせたら？」

「あつ……！」

永緑は口を押えた。鳩村も合点がいったように頷いた。「へびだ。へびなら、鍵を入れたマウスを丸呑みできる。そして、扉の下の隙間を通り、床の出っ張りを超えて、フクロウ部屋に入るこ

とができる。何より、へびは、フクロウが捕食する爬虫類の一種だ。Aさんは、Bさんを殺して、鍵をBさんのポケットに入れた。その後、フクロウをケージから出し、部屋から出て合い鍵で施錠し、密室を完成させた。そして、マウスに合い鍵を入れ、そのマウスをへびに丸呑みさせて、そのへびを部屋の中に送り込んだんだ。あとは、フクロウがへびを丸呑みしてくれる。

……要するに、密室の構成はこうなつていたんだ。密室の中にフクロウ、フクロウの中にへび、へびの中にマウス、そして、マウスの中に鍵……まさに、マトリョーシカだと思わないかい？」

「なるほど、マトリョーシカというのは、そういうことだったんですね」永緑が納得した表情で言った。

「確かに、入れ子構造という意味で、マトリョーシカね」と鳩村。

「うん。へびを部屋の中に送り込んだ後のAさんの行動は簡単だ。

鳩村さん呼び出して、部屋が密室であることを確認させてから、鍵を開けてもらい、仕上げて、窓を開けてフクロウを逃がした。逃がしたのは、ペリットの問題が残っていたからだ。フクロウからは、マウスの毛と骨、ヘビの骨、そして、部屋の合い鍵——これらがペリットとして出てくるはずだ。このペリットが部屋の中で吐き出されると、トリックが露呈して非常にまずい。Aさんには——少なくとも、フクロウがペリットを吐き出すまでの間は——フクロウを外に逃がしておく必要があった。だから、血の臭いを理由に窓を開けたんだ」

事件の推理を、明瀬はこう締めくくった。

「クイーンが、チェス盤からキングを追い出して、試合終了……」